

特集 地域づくりを担う人びと

昨今、「地域再生」という掛け声が行政や企業からも叫ばれて久しい。少子高齢化、経済格差などの問題に加え、近年では東日本大震災に続き、台風・地震などによる自然災害、人的災害が日本列島で後をたたない。今号のハリーナは、このまま放置されれば壊されかねない地域を、住民たちの創意工夫と労働で豊かに再生する取り組みを特集した。

四国、福島、山形、そして東京で奮闘する人びとの試みは、それぞれの事情は違っても、期せずして「自然と人とのち」を根底にした地域づくりという共通の思いをもっていることに気づく。

災害に負けない森づくりと営林、自前で作る食とエネルギー、食べものを通した子どもたちへのいのちの教育……こうした創造的な実践を、APLAのパートナーであるネグロス島や東ティモールの農村へつなげ、越境する住民の知恵を交流させたい。(編集部)

林業で安定収入を上げれば 観光の質も上がる
自伐型林業は、大規模な土地を



上垣喜寛 / うえがき・よしひろ
ジャーナリスト、NPO法人自伐型林業推進協会事務局

山を目指す若者たち

ウナギや鮎、手長エビなど貴重な生き物の宝庫である四万十川。その豊かな自然環境を守り、次世代に引き継いでいくため、山に入っていく若者たちがいる。

この地域で生まれ育った宮崎聖(38)さんは、「子どものころは、もっと採れた」と手長エビが入った網を差し出して言う。宮崎さんは、地元で自伐型林業を推進する「シマントモリモリ団」の団長で、林業を通じて地域づくりを行う若手グループのリーダーだ。

「軽トラックが通れるくらいに道幅2・5メートル以下の作業道を作ることで、間伐や木材の搬出が楽になります。山の持ち主や地域に住む人が山林の手入れをすることで、持続的な収入を得る林業を展開する。これが自伐型林業です」と宮崎さんは説明する。宮崎さんが林業に取り組む前は、木材加工所のと継ぎとして仕事

お買い物はどこで?

中山るりこ / なかやま・るりこ
NPO法人ロータスプロジェクト

最近、スーパーで買っているものが減った。特に食品。野菜や果物、肉、魚、海藻や加工品、お菓子や調味料まで。どこで買っているかと言えば、ファーマーズマーケットやバー、イベントのマルシェ、そして知り合った農家さんからの直送、お気に入りの八百屋さんや肉屋さん。作っている人や、思いを持って商品を集めている人から、畑や工房の話聞きながら買っているのはとても楽しい。いつの間にか、そういう食つなりの人が知人に増えてきた。

「お高いんでしょ」と、贅沢な遊びだと言う人もいる。スーパーの安売りを探すよりは高いこともある。でも、どぴきりのものが手に入る。物語のね。この楽しい買いものをほかの人にも届けたくて、お寺のお堂でマルシェを始めた。お堂の中の小さなマルシェ。年に数回、いろんな志を持った人が、その思いを物に託して参加してくれる。お客さんたちも来てくれたり、まあ、あまり来てくれなかったりだけれど、そのたびに新しい出会いと新しい物語がある。人間って、面白い。すべての人に物語がある。わたしは物を通して、人のストーリーに出会っている。

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ」(水たまり)が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつの間にか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。



CONTENTS ■ HALINA 34 2016.11.01

02	Relay Essay ポコポコ 34 お買い物はどこで? ◎中山るりこ
03	【特集】 地域づくりを担う人びと 山を目指す若者たち ◎上垣喜寛 [レポート] 農地の上で太陽光発電 野菜もエネルギーも生産します! ◎大内 督 住民の手による「地域再生」 素人の強みは身の丈にあった確かな技術 ◎足田美津子 校庭を畑に換える 愛和小学校のエディブル・スクールヤード ◎吉澤真満子
09	【Topics】 東ティモール: 未来への種まき —— 子どものための環境キャンプを元気に開催 ◎野川未央
10	【Column】 Kakao Kita カカオ民衆交易奮闘記 16 豊かな森の恵み サゴヤシ ◎津留歴史子 百姓の100章 4 百姓はくすもろ・ファミリー・ファーマーズ) 「わたしの大好きな家族」斎藤彩葉(8歳)の作文より ◎斎藤博嗣 & 裕子 カネシゲファームのドタバタ騒ぎ 4 明日のご飯はカエルカレー! ◎寺田 俊 続 Have you ever seen the cinema? 4 『マイ・ビューティフル・ランドレット』◎重政栄一郎
12	わたしの友産友消じまん 6 自給農園ミルバの巻 ◎伊藤文美
13	APLA食堂 16 パレスチナ エキストラバージンオリーブオイル ◎吉田友則
14	【Voice from APLA partners】 【インドネシアより】 エビ養殖池周辺の村でゴミ回収リサイクルを! 【ネグロスより】 スタッフも研修生たちも頑張っています。
15	事務局だより

表紙のことば

フィリピン・ミンダナオ島南西部の町サンボアンガ。「フエノス・ティアス! (こんには)」 「グラシヤス! (ありがとう)」と、行き交う人びとの挨拶にスペイン語が混ざる。この地域だけで話されるチャバカーノという方言だ。ランの花を意味するこの町はかつてキリスト教徒とイスラーム教徒が平和に共存していた美しい港町だったといわれている。1970年代にイスラーム過激派掃討と銘打った政府軍の攻撃が始まり、その後は米軍との共同演習も加速化され、ランの花の町は最も物騒な地域の一つになってしまった。それでもサンボアンガの港ではイスラーム教徒の女性たちが、アクセサリーやパティック(ろうけつ染め)を所狭しと並べ販売をしている。色とりどりの布の中から見つけたこの生地はメイド・イン・インドネシアだった。欧米の植民地宗主国が勝手に国境を作ってしまったずっと以前、12〜13世紀に広がったイスラーム圏時代の交易がこの地域ではまだ独自に継続しているかのようだった。(大橋成子)

講師を呼び若手が学ぶ場もつくる。



うはさせてくれない。そんな空気が漂う。最前線にいるのが、宮崎さんたちの住む中山間地域だろう。宮崎さんは川遊びに興じる観光客を眺めながら、「観光客を追っていても地域に住む人は減っていきまます。周囲の山林が荒れれば、観光資源の四万十川も汚れていきます。小規模・分散型の自伐型林

業で暮らしをつくり、山を管理する人が増えれば、地域も活気づきます。自伐型林業は地域づくりです」と力を込める。高知県内の各地で自伐の展開は広がり、県は「小規模林業推進協議会」を昨年立ち上げ、機械のレンタル代や傷害保険の補助などを行うようになった。会員は300

名を超え、サラリーマン以上に収入を上げる若手も育っている。さらに、全国の23自治体が支援をするまでに広がり、中には静岡県熱海市のような観光地が、宮崎さんの取り組みを参考にしながら林業や福祉と組み合わせたライフスタイルを開発しようとしている。無理に専門を目指す必要はなく、春・夏は農業、秋・冬は林業という昔ながらの「農家林家」の兼業を目指す例



宮崎さんと直美さん。

一斉に伐ってしまふ皆伐のような環境負荷のかかる林業は基本的に行わない。チェーンソーと搬出用の林内作業車、道づくりに必要な小型バックホーなど最低限の機材があれば、数名のグループで作業できる。参入のハードルが低く、小規模経営から始められる。余計なコストがかからず手元にお金が残る、固い経営ができるのが最大の特徴だ。4年目を迎えた谷吉夫妻の昨年の山の収入はいくらか。家などの建築に使われる用材（A材）販売と作業道などの補助金をあわせて約140万円（秋冬の3ヶ月、さらに四万十川河口の温泉施設に薪の消費先によるポイラシステムを宮崎さんが営業して作ってくれたので、普段は山に捨てられるような低質

材（C材）も約12万円の収入につながった。月10万円の機械のリース代と燃料代を引いても、結果的には収入ゼロの秋冬シーズンに2人で毎月40万円ほどの収入を得られるようになった。「今年で3年目の道つけです。初年度に300メートル、翌年にはさらに500メートルを作り、総延長は1キロを超えました。やればできるものですね」と梢さんは照れ笑いを浮かべる。もし、道がなければ、何時間も歩かなければ現場に辿りつけない。急傾斜の山に機材を背負って登るのは厳しい。どう頑張っても2人で木材を搬出するのは無理だろう。プロの作業グループに作業を委託するしか道はないと考えるのが自然かもしれない。だからこそ、この作業道の開設が低コストの持続可能な林業を実現する自伐型林業のポイントになるのだ。

自伐型林業に取り組む宮崎さんは、「初めはカヌーが楽しかったし、しばらくエコリズムが流行っていて林業にピンときていまして。でも、林業を安定収入と考えるとカヌーのお客さんを必至で追っかけるよりも（林業を）

やったほうがはるかにいい。そこで計算がたてば夏の観光も質も上がりまし」と林業を軸にしたスタイルこそが観光地の新たな生業の形だと話す。

続く移住者たち

宮崎さんたちの活動拠点である宿泊所「川辺のコテージ」には、四万十川を目指すお客の他に、彼らのライフスタイルに惹かれる旅行者も後を絶たない。

今年、移住を決断した久保田恭彦さん（46）・七海さん夫妻もそのうちの一組だ。都内でサラリーマン生活を送っていた二人は、都内の勉強会で自伐型林業の存在を知り、全国の自伐型林業者をまわった末に四万十への移住を決めた。肝心の家は、宮崎さんたちが一軒家を探してくれた。

間髪をいれず、都内でメーカー勤務をしていた石井雅明さん（50）も続いた。石井さんは昨年3月に宮崎さんらが開いた林業の体験講座をきっかけに自伐型林業家を志すようになった。「宮崎さんから『いい山が見つかったよ』と声をかけられ、迷わず移住の道を選びました。都内の一軒家は買い手を募



東京から移住した久保田恭彦さんと七海さん。

集中です」と頭をかく。確保した約15ヘクタールの山林で、林業人生を歩む準備を進めている。

自伐型林業に取り組みながら、地域の家や山林の情報を集め、新たな人材の掘り起こしのために林業体験ツアーを企画する宮崎夫妻。就業支援をする彼らの住む20世帯の2集落に、林業の担い手たちが集まってきた。

自伐型林業は地域づくり

2014年に日本創成会議による「消滅可能性自治体」論が日本全体を覆うと、地方は危機感を煽られ、人口減少や高齢化をどう乗り越えるのかという「地方創生」論が矢のように突き立てられた。安定した暮らしを送りたいが、そ

も増えている。

稲を刈られた田んぼの背後には、広大な山林が広がっている。日本列島の7割を占める森林を活用した林業、それも低投資で始める自伐型にこそ、中山間地域でも安心して暮らせる「地方創生」のヒントがあるのではないだろうか。

上垣喜寛（うえがきよしひろ）
2008年よりフリーで執筆・映像製作等の活動をスタート。12年から林業現場の取材を重ねる。共著に『震災以降』三書/14年、『深海でサンドイッチ（こぶし書）15年』等、映画『自由貿易に抗う人々』（16年）を初監督。和歌山県に先祖の山を持つ。

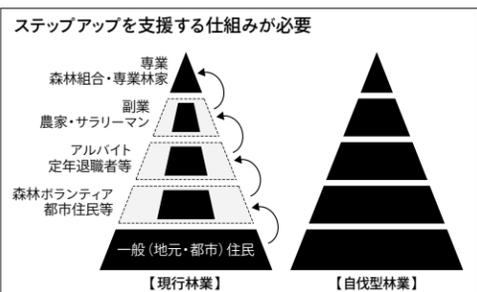
レポート Report

農地の上で太陽光発電 野菜もエネルギーも生産します！

大内督／おうち・おさむ
二本松有機農業研究会

私の所属する二本松有機農業研究会は、1979年に父が環境負荷の少ない農法で土づくりをし、健康で味のよい農産物を生産することを目的に地域の仲間と設立し、有機農業に取り組んできています。

困難は多々ありましたが、消費者との提携を柱に顔と顔の見える関係を大事にし、着実に歩んできました。消費者はただ野菜を買うのではなく、畑に足を運んでもらい、援農を通じ



専門ばかりを伸ばそうとした現行林業（左）とボランティアから副業型まで広い地域住民の参加を促す自伐型林業（右）の比較ピラミッド。

て農家の苦勞や思いを一緒に分かち合い、地域の環境保全、有機農業の発展に取り組んできました。ただ、消費者との提携だけでは閉塞感があり、有機農業の発展に限界があったため、生協関係や小売店にも農産物を卸して、より多くの方に有機農業へ関心を持ってもらい理解されるよう努力してきました。

2006年に、有機農業推進法が制定され、これからは有機農業が認知

され発展すると期待していた時に、2011年3月の東日本大震災に伴う原発事故による放射能汚染が発生しました。提携先の消費者も半分以上にまで激減してしまい、それまで顔と顔の見える関係で大事に築き上げたものもろくも崩れました。汚染された福島で有機農業はありえないと、他県の仲間から言われ、この地で農業をやることは罪なのではないかと相当悩みました。しかし、大学の先生や研究者が福島で調査をしてくれ、粘土質と腐植の複合体である肥沃な土壌、多様な土壌微生物の多い有機的な土づくりこそが放射能汚染に打ち勝つ農地再生への近道だと実証してくれたおかげで自信も出てきました。

消費者が減っていく時には、提携によって築かれた関係は何だったの



ソーラー発電の勉強会で、パネルを手作り。

か悩みましたが、冷静に考えれば当たり前前のことだと思えるようになり、ここで悩むより、二本松の野菜を食べたいと残ってくれた人たちのために、安全でおいしい野菜を作ろうという気持ちになりました。そのため農作物を生産したら、測定し、公表することを徹底しています。今では徐々にではありますが消費者も増えてきています。新規の消費者が多いですが、震災前の消費者も戻ってきてくれ、うれしい限りです。また、3名の若い生産者もメンバーに加わり、我々の会も活気が出てきました。

原発事故を風化させない光を灯したい

震災後、APLAと共催で「福島百年未来塾」を開催し、勉強してきたなかで、エネルギーの問題が焦点となり、我々も何かできないかと考えるようになりました。不耕作地解消のために、ソーラーやテントコーンを栽培し、バイオマスプラントで発酵させ、発生するメタンガスでタービンを回して発電するバイオガス発電に興味を持ち、勉強会や視察をしました。APLAを始め、色々な団体の協力でドイツへも視察に行きました。

勉強したなかで、バイオガス発電は初期投資とランニングコストがかかり、現在の我々の力では実現するには厳しいと判断しました。今進め

の6割を森林が占め、その半分は戦後の拡大造林による杉の人工林ですが、近年、高齢化や後継者不足で手入れが行き届かないまま線香林と化しています。集中豪雨の頻発という直接的原因はあるにせよ、森林荒廃という間接的原因が災害の元であることは明らかでした。

森づくりへの挑戦

エネルギーのことだけ考えていてはだめなんだ、森林の在り様に目を向けなくては自分たちの命が危ないという意識が高まり、再生ネットの会合でも「森をどうしていくか?」「災害に強い森とは?」といった議論が始まりました。専門家だけでなく前で災害に強い健全な森づくりができるよう、林業家を招いて素人のための間伐講習会も開催しました。

そうしたなか、林野庁の「森林・山村多面的機能発揮対策交付金」を知り、これを活用して実際に森づくりを始めよう、ということになりました。再生ネットが事務局を担い、財産区(共有林)や個人山主に声をかけ実施母体を結成しました。広い林地を有するお寺の護国寺も加わりました。打ち合わせの会合には、再生ネットの会員のほか、区長や財産区の役員、寺の住職なども加わるようになりしました。

「多面的交付金」は森林整備の人手に充てることのできる交付金で、



チェーンソー講習会。メンテナンスについて詳しく聞く(瑞巖寺林地)。

地域住民の手で森づくりをしたいと考える私たちにはもってこいでした。おかげで、過去3年間で整備した森は90ヘクタール。素人の森づくりの鍵は、安全で確かな技術の習得にあります。交付金で熟練者に講師料を支払い、少人数の「チェーンソー講習会」を各地で開催しました。チェーンソーの操作や樹木の伐倒手順だけでなく、機材の内部の掃除の仕方目立てなどのメンテナンス、お得なオイルの選定まで丁寧に教えてくれる講習会を開催し、参加者に喜ばれました。間伐する際に、どの木を残し、どの木を伐るかの目を養うための選木講習会も開催しました。

そしてこの夏、吉野の林業家で長伐期択伐施業を長年続けている方を招いて3日間の「路網研修」も開催しました。ヨーロッパ型の、高性

ているのが、農地の上でソーラー発電をするソーラーシェアリングです。野菜もエネルギーも生産できます。それも農閑期の時期に我々自身で建設しコストも抑えられるように考えています。実際に2016年1月に隣町でソーラーシェアリングの建設作業を実施しています。農地転用などの許可、資金面ではまだまだクリアしなければならぬことはありますが、実現できるように頑張っています。多くの人にエネルギーへの関心を持ってもらい、バイオガス発電

レポート Report

住民の手による「地域再生」素人の強みは身の丈にあった確かな技術

疋田美津子 / ひきた・みづこ

NPO法人しらたか地域再生ネットワーク事務局長

福島原発事故後の2013年6月に、脱原発と再生可能エネルギーによる地域循環型経済の構築を目標に、山形県白鷹町の住民50人ほどでNPO法人「しらたか地域再生ネットワーク」(以後、再生ネット)を発足させました。数名の発起人がそれぞれ知り合いに声をかけ、建設会社や縫製会社の社長さん、商店主、農民、現役またはOBの町会議員、主婦など、さまざまな職種の人たちが集まってくれました。太陽光発電や森林

バイオマス発電の学習会を定期的に開催し、地域の条件に合う自然エネルギーは何かについて討論を重ねました。ところが、2013年と14年の7月、町は2年連続で豪雨災害に見舞われ、土砂崩れや河川の洪水があちこちで発生し、甚大な被害を受けました。杉の木が根こそぎ河川に流れ込んでいた写真が町報に掲載され、自分たちの裏山が危ないことに初めて気づかされました。白鷹町の面積

能機械が通れる広い道を切り開くのではなく、軽トラが通れる程度の道幅2.5メートルの路網を、山の地形や土質を考えながら路線を頭に描きつつ造成するのです。講師を先頭に半日は対象林を踏査し、その後1日半かけて約40メートルが造成されました。座学の中でこの林業家曰く、「私の教える路網は」ホーチミンルートと同じで、正規軍ではなくゲリラの道。遠くから見ても道があると分らない道であり、災害に最も強い壊れない道。地域住民の手で、身の丈に合ったやり方で、森を守り、

レポート Report

校庭を畑に換える愛和小学校のエディブル・スクールヤード

吉澤真満子 / よしざわ・まみこ

APLA事務局長

東京都多摩市立愛和小学校には畑がある。日本の公立小学校で初めて「エディブル・スクールヤード」が実践されている。聞きなれない英単語だが、直訳すると「食べられる校庭」。

発祥地は、米カリフォルニア州バークレー。1995年からある公立中学校で始まった。90年代の米国では学校の荒廃が問題となっていた。子どもたちを取り巻く食環境も、ファストフードが当たり前。こうした状

実現への足掛かりになればと考えています。

原発事故によりいまだに9万人近い避難者がいること、放射能汚染の問題は依然として異常な状態が続く福島ですが、これを日常と捉えはじめている人も多く出てきています。何とか風化させないために、この小さな光を灯すことにより、希望を見つけ、福島の復興へと進んでいければと考えています。

〈注1〉茎や葉を飼料したり、茎からシロップを製造するモロコシの一群。

生計を立てる。私たちの進むべき道を照らす言葉でした。

再生可能エネルギーという視点だけでなく、健全な森づくりから、そのバイオマス利用へという方向に進むことで、より包括的視点に立った「地域再生」のイメージが仲間たちに共有されつつあります。

〈注2〉手入れをせず、放置されることで地面に光が届かず、地表の栄養が雨で流れ、高く伸び太らない木が立ち並び人工林。

〈注3〉一般的には40〜50年で伐採される場所、100年、200年と長期に渡って木を選んで択伐し、森林の持つ保全機能が維持されるようにする。

況を解決するために、校庭を畑に変え、子どもと大人が協働して育て、調理し、食べる経験を通じて、自然とのかわり、命のつながりを体験的に学ぶ教育である。

「エディブル」と子どもたち

愛和小学校は多摩ニュータウンの中に位置する。かつては巨大ニュータウンであったが、バブル崩壊を境に人口が減少し、少子高齢化が進ん

でいる。こうしたなか小学校も学区編成による統廃合が進められ、愛和小学校も4年前から2つの小学校の統合によって新校になった。統合により、ひとり親や外国人の親がいる世帯が多い都営住宅中心の地区と、住宅の再開発により新しく移住した世帯が多い地区が一緒になった。地区の違いで、所得層も異なり、新しい学校づくりには困難が伴う。



畑で作業する子どもたち。

継続的なガーデンとキッチン授業をするなかで、少しずつ変化が起き、なかでも「大根の授業」が子どもたちを変えていった。堀口さんが知り合いの農家から在来種の大根の種を分けてもらい育てた時のこと。収穫した大根は、様々な形や色をしていて、重さや長さを測って観察し、絵に描いた。その後には、シエフと一緒に大根もちやスープにして食べた。子どもたちはこうした一連の体験のなかで、多様性は大根に限らず、クラスにも様々な子がいることも同じであることを学び取っている様子だった。「エディブル」を経験して卒業した生徒たちは「これからもこの授業は続けてほしい」と学校に話したそう。

子どもの変化が親を動かした

保護者の中澤愛美さんは「エディブル」により変化した子ども姿に動かされた一人。娘さんが次第に食に興味を持ち始め、家で料理をしたと言つようになったという。校長先生が変わることを知り、「エディブル」を残してほしいと声を上げたのは今年3月のこと。保護者の間でも草取りボランティアをする人が出てきて、現在15人の有志で無理なく作業をしている。中澤さんは当初、娘のためを思って「エディブル」を残してほしいと思っていたが、自分が土を触り作物を育ててみると、そ



「エディブル」では子どもも大人も対等な関係で作業する。

のおもしろさを実感するようになって。「子どもが卒業しても、地域の一人として参加するかもしれない」。中澤さんは「エディブル」がきっかけでよく学校にも顔を出すようになった。放課後に、スタッフたちと一緒に男子生徒が作業をしている様子を目にしたこともある。彼の夢は農民になること。今後は、「放課後エディブル」も実施できないかと話が上がっている。

地域の中での「エディブル」

愛和小学校の「エディブル」の取り組みが始まって3年目。公立学校ゆえの難しさもある。1校のために特別予算を付けることが難しい。先生たちや地域の理解も必要だ。しかし、多摩市議の岩永ひさかさんは「エディブル」に期待を寄せる。「子

どもによっては味噌汁を食べたことのないような子や、学童のお弁当がビニール袋にパン1個だったという話も聞く。単に食べていけば貧困ではない、というのではない。おいしい食べる環境や、団欒という言葉が死語になりつつある昨今、「エディブル」は食べることでつながりが作れる。地域の人も巻き込んで子どもたちを育てる。多摩市でも子ども食堂があるが、それだけだと子どもは単なる受益者のまま。汗を流して自分の力で食べていくことが生きる力になる。そのことは、子どもだけでなく都市に住む大人にとっても大切なのではないか。

(一社)エディブル・スクールヤード・ジャパンの堀口さんは、現在クラウドファンディング「READY FOR」で、エディブル・スクールヤードの活動を充実させるための資金の呼びかけをされています。11月15日までに目標金額300万円を集めています。ぜひご協力よろしくお願いします。
●プロジェクト支援はこちらから <https://readyfor.jp/projects/edibleschooyard>
「校庭を農場に! アメリカで急速に広まる食育システムを日本へ!」



各地域からの参加者が入り混じったグループに分かれて学びました。

東ティモール・未来への種まき
—子どものための環境キャンプを元気に開催

野川未央 / のがわ・みお
APLA事務局

言葉は「PREPARA AN BA FUTURU SUSTENVEL(持続可能な未来のための準備をしよう)」。2016年8月、エルメラ県レテフォホ郡のコーヒー産地の村で、小学校高学年の子どもを対象にした環境キャンプ「Perna Kids Camp」が開催されました。東ティモールを代表するミュージシャンであり環境活動家でもあるエゴ・レモスさんが代表をつとめるNGOパーマティル(Permatil)とAPLAとの共催で、農村に暮らす子どもたちが、自分たちのいのちを支える環境のこと・自分たちで土を耕すことの大切さなどを、体験を通じて学ぶ機会をつくり将来につなげたい、と企画したキャンプです。

「食や自然を学ぶ子どもたちのキャンプ」

エルメラ県内および隣県のリキサ島の5つの地域から集まった子どもたちは150人以上。最初は、ほとんどの子どもたちが緊張していましたが、歌や踊りを盛り込んだアイスブレイクが



水源保全の実例から学ぶ子どもたち。

ログラムを通じて、どんどん積極的になっていました。パーマカルチャーや循環型農業を実践的に学ぶテーマ別ワークショップ、水源保全についてのミニレクチャーと観察会、ゲームや歌を通じて身体をつくる栄養素について考えるプログラム、環境について学ぶ動画の上映、キャンプファイヤーを囲んでの出し物大会など、普段学校では体験できないような様々なプログラムが用意された3泊4日。子どもたちの生き生きとした表情が忘れられません。

地域ボランティアが支える

電気も水道もガスも通っていない村での大掛かりなイベント。100人を優に超える村外からの参加者やボランティアスタッフのための宿泊場所や水回りの設営、食事の準備など、ハード面の準備は数カ月前から進めていきま

キャンプには、来賓として東ティモール教育省の副大臣も参加し、プログラムを一部視察。セレモニーの中の基調スピーチでは、参加者の子どもたちに対して「今回学んだことを自分の家、自分たちの学校で実践することが大切。全国の子どもの見本になってください!」と、熱いメッセージが送られました。なお、東ティモールでは、エゴ・レモスさんのがんばりが成果を結び、公立小学校の新しいカリキュラムにスクールガーデン(学校菜園)の取組みが導入されました。子どもたちが学校や自然について学ぶための準備が進んでいます。今回のキャンプに参加した子どもたちが、村に帰って学んだことを実践していく。今後は、そのサポートにも力を入れていくことで、学校をひとつの起点にした「農を軸にした地域づくり」につなげていけるかもしれません。

した。開催時期を子どもたちの夏休みにあわせてためにコーヒーの収穫時期と重なってしまい、キャンプの受け入れを引き受け、準備に奔走してくれたリアモリ集落のコーヒー生産者たちは「コーヒーに手が回らなくて木の上で腐っちゃったよ!」と軽口をたたく場面も。それでも、「子どもたちのため、地域の将来のためだからね」と、誇らしそうでもありました。また、中学卒業後、ぶらぶらしていたような村の若者たちがボランティアスタッフとして積極的に準備・運営に関わってくれたことも一つの大きな成果です。

2010年から小規模コーヒー生産者グループとともに進めてきた持続可能な農業や環境保全の活動ですが、今回の子ども環境キャンプは色々な形で未来への種まきになったと信じています。

〔注〕パーマニメント(持続性と農業(アグリカルチャー)そして文化(カルチャー)を組み合わせた言葉で、持続可能な農業をもとに持続可能な文化、即ち、人と自然が共に豊かになるような関係を築いていくためのデザイン手法。

03

カネシゲファームの ドタバタ騒ぎ



寺田 俊 / たらた・しゅん
APLA事務局



みんなでカエルをさばきます。

ある日の夜の話。スタッフや研修生とお酒を飲んでいるとき、他愛もない会話から話題は明日のご飯のおかずについてになりました。ここでは共同生活なので、その日ごとに担当のスタッフや研修生がご飯を作ります。

研修生のひとりが冗談で「カエルは？」と言うと、スタッフ・レネが「最近食べてないなあ。いいね！」と乗り気になりました。ではカエルで何の料理を作るか。醤油とお酢で炒めるか、ココナツミルクで煮込むか……。すると、スタッフ・ジョネルが「カレがあるから、チキンカレーならぬカエルカレーにしよう」と提案。その提案が通り、明日のメニューはカエルカレーに。カエルは市場やスーパーでは買いません。5

ヘクター以上あるカネシゲファーム内を探し回り、捕まえるのです。レネの提案により「ひとり5匹捕まえてら寝ていい」というノルマを作り、お酒を飲み干して、懐中電灯片手に農場に各自出て行きました。しかし、この日は雨が降らなかったのになかなかカエルを探ることが難しく、だんだんと探す気がなくなってきました。そんな頃に同じくやる気をなくしていたスタッフ・エムエムとジョネルに会い、「もう寝ちゃおうぜ」となりました。残されたレネと研修生・ロドニーを置いて3人は先に寝ることに。お酒も入って、気持ちよく寝ようとしたとき部屋の外からレネとロドニーの声が。レネ「何匹捕まえた?」、ロドニー「12匹くらいかな。レネは?」、レネ「俺は20匹以上はあったな! はははは!」

横になりながら聞いていて、凄いなと驚きながら、先に寝て申し訳ないと思いつつ、そのまま就寝。次の日はみんなでおいしくカエルカレーを食べました。もちろん朝一番に2人に色々言われたの言うまでもありませんね。

みなさん、カエルと聞いて、げ!と思っただけかもしれませんが、それは食べたことないからです。とっても美味しいのです。

01

カカオ キタ kakao kita

カカオ民衆交易奮闘記

16

津留 歴子 / つる・あきこ
オルター・トレード・インドネシア社現地駐在員



斧1本であつという間に切り倒す。

豊かな森の恵み サゴヤシ

パプア沿岸部の森の中ではサゴヤシをいたるところで見かけます。このサゴヤシから採れるでん粉を熱湯で溶いたジェル状の食べものがパプア人の主食パベタです。

先日このサゴヤシからでん粉を採取する一連の作業をカカオ生産者ウイラムさんの森で見学しました。通常男女あわせて10名位で作業します。サゴの木を倒すのは男性の仕事です。今回選ばれたのは樹齢12年目、高さ15メートルはありそうな木でした。皆固唾をのんで見守るなか、斧が幹にくい込む音が広い森にこだまします。太い幹でしたが樹芯はでん粉質で柔らかく、10分もたたないうちに大木はメリメリと音を立て大きな地響きとともに大地に倒れました。すぐに男性たちは樹皮をはぎ取り、固い木の先を尖らせた道具で小刻みに樹幹を叩きバルブ状に砕きます。女性たちは川で、このバルブを水に通

して絞り、でん粉を沈殿させます。水を汲み入れ物、バルブを水に浸して押し絞るための流し台、でん粉を沈殿させる槽など全て森にある木の枝や樹皮で作っていました。人びとが森の産物をとて上手に利用していることにただただ感心するのみ。

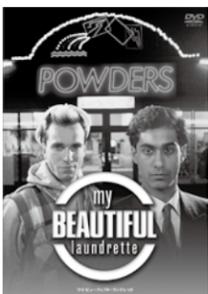
一本のサゴヤシから200〜300キロのでん粉が採れ、一家で半年は食べていけるそうです。サゴヤシは肥料いらず、病虫害もなく、切ったあとにはその株からまた新たな木が成長するそう、パプアの人びとにとっては本当に頼りになる森の恵みです。そんなサゴヤシですが、世界的食糧危機の救世主になるとか、工業製品としても利用できそうとか、はたまたサゴのでん粉がグルテン・フリーという点で小麦粉の代替品になりそうなど、最近にわかに注目を集め、今後研究開発が進みそうです。そんな外部の思惑は全く知らず、豊かな森と川を舞台にサゴヤシ作業に精を出す人びと。パプアの人びとが安心して生きていくことを支えているサゴヤシがこれからのパプアの人びとのものであり続けようように……。

04

Have you ever seen the Cinema? ああ映画を見たかい? — 04

『マイ・ビューティフル・ランドレット』
【原簿】 My Beautiful Laundrette (1985年、英国)
【監督】 スティーブン・フリーアーズ 【出演】 ゴードン・ウォーネック、ダニエル・テイ・ルイス

重政 栄一郎 / しげまさ・えいいちろう
エディトリアル・デザイナー



『マイ・ビューティフル・ランドレット』
発売元・販売元:株式会社KADOKAWA
価格:1,800円(税別)

1980年代のサッチャー政権時代、構造的不況にあえぐ英国・南ロンドンの荒んだ雰囲気漂う下町が舞台。主人公はパキスタン移民二世の青年オマール。英国で生まれ育った彼は故国を一度も訪れたことがなく、話せる言語も英語だけ。「自分の国のないとちつかず」である。オマールはこの地で経済的に成功した実業家の伯父(父の弟)にオンポロのコインランドリーの経営を任せられる。地元民で幼馴染の友人ジョニーを雇い入れ、二人で協力してこのコインランドリーを立て直す(二人はゲイで恋人でもある)。野心家のオマールは言う。「俺は金持ちになる、英国に負けてたまるか。学校ではお前ら(地元出身の同級生に)いじめられていたが、今じゃお前らを使う身だ」。

その「お前ら」たちは今、職が無く、集団で無為に街をふらつく。パキスタン移民を「パキ」と蔑称で呼び、「ジャングルに帰れ」と敵意をむき出しにする。「なぜパキのために働く」。

奴らは俺たちが使うために連れてきた連中だ」とジョニーを責める。

一方、裕福なパキスタン人コミュニティでは英国のことを「ちっぽけな島」、英国人を「差別主義」「アホ」とせせら笑う。そして素行不良の地元若者を「不潔で無知で敬意のかけられない連中だ」と嫌悪する。

そんなパキスタン人社会では男性優位の文化が深く根づいている。成金の伯父は家庭では王様のように振る舞い、外ではゴージャスな英国人の愛人を連れ回す。父の横暴に反発する娘は家を出し、家族は崩壊する。最後にオマールの父。酒浸りで体を壊し貧乏暮らししたが、かつては高名なジャーナリストで左翼知識人。彼は自らが世話をした若者たちがデモで移民排斥を叫び、暴れるのを見て労働者階級に失望し、挫折する。

そして妻(オマールの母)にDVを繰り返して、自殺に追い込んでいた。息子の仕事を「パンツの洗濯屋」と蔑み、大学に行くように強要する。

拜金主義の伯父は、英国に幻滅したインテリの兄(オマールの父)に帰国を勧められた際に言う。「故郷は宗教に侵されて満足に金儲けできない。よそと比べればここは天国だ」……。

差別と憎悪と疎外は、重層的で多面的で、ねじれて歪んで表出する。

02

ひろつくとゆうこの 百姓の100章

A Farmer have One Hundred Stories.



斎藤 博嗣 & 裕子 / さいとう・ひろつぐ & ゆうこ
一反百姓「じねん道」



イキモノたち、子どもたちから「世界平和とは何か?」を共に生き、育つ百姓暮らしの中で、考えさせられる毎日です。

第4章 「百姓は(スモール・ファミリー・ファーマーズ) わたしの大好きな家族」斎藤彩葉8歳の作文より

私の家族は、お父さんとお母さんと弟と私の4人暮らしです。ネコを9匹飼っています。そのうち1匹は子ネコで、赤ちゃんネコもいます。

私の家は、75年前位に建てられた木のお家です。水は、水道水ではなく、井戸水です。お風呂は、マキでわかします。庭には、緑がいっぱいで、カブト虫やトンボ、バッタ、チヨウ、カマキリ、テントウ虫、クモ、ハチ、セミなど100種類くらいいるいろな虫がいます。私と弟は、晴れた日は庭に出て、虫をつかまえるのが楽しいです。つかまえた虫は、その日のうちにがします。

お父さんとお母さんの仕事は、お百姓さんです。お百姓は、お野菜を作るだけでなく、自分たちでできる事は、自分たちでやる仕事です。た

たとえば、屋根にのぼって雨もりを直したり、井戸を非常に「つるべ井戸」として使えるようにもしました。お父さんが1番する仕事は、畑仕事です。朝早く起きて畑に行っている事が多いです。タネとりの季節には、お野菜やトウガラシ、麦、豆類のタネを家に持ってきて、タネがついている部分を、弟と私とお父さんとでタネをとって、お日さまに当ててかわかします。その後、お母さんが種類ごとにタネを袋に入れます。それを東京の本屋さんに出荷します。35種類のタネを売っています。

ネコも仕事をしてくれます。「ブブ」という家に来て6年になるお母さんネコがネズミをとってくれます。ネズミは、食べ物食べてしまうので、ネコがつかまえてくれて本当にあつかります。私と弟は、お母さんとお父さんの手つだいをしています。家族全員のおふとんをたたんだり、ごはんを運んだり、おしろい花のタネをとったり、お野菜のしゅうかくをしたり、いろなお手つだいをしています。お母さんは、お父さんが育ててくれたお野菜で、お料理を作ってくれます。私は、お母さんが作ってくれるお料理が全部好きです。私は、お父さんも、お母さんも、弟も、ネコも、家族全員、大好きです。

APLA 食堂

Kitchen A P L A

今日の食材 パレスチナ エキストラバージンオリーブオイル

吉田友則 / よしだ・ともものり
出張料理「きまぐれや」シェフ

ギフトにいかがでしょう?

オリーブオイル。プロとして仕事している中で塩と同じ位日常的に使うものです。御縁あって私はパレスチナ産のエキストラバージンオイルを使用しています。彼此15年にもなるのかな? これだけ使用すると、うちの料理の基本の味わいの一部になっています。一口にオリーブオイルと言っても産地、種類、加工方法、その年の気分で味わいが違うし、これまた、食べる側の嗜好が違うから一概に何がいいとか言えないシロモノ。過去に、15種類ほどのオリーブオイルと10種類ほどの食材をあわせてテイस्टングをしましたが、他の素材とはちっともあわないのに、トマトソースの Pasta にかけてたら劇的に旨い! そんな種類もあったりで……。そんななか出会ったパレスチナのオリーブオイル。辛いですよ、青臭いですよ。これ使えますかね? と半信半疑な話だったが、あわせてみると、醤油やセリ、クレソン、青魚と少し癖の強いものとあわせるとまろやかに、マリアージュしてくれました。日本全国旅するのが仕事な僕は、各地で出会う素材にあわせて使い続けています。そんなパレスチナのオリーブオイル。新しい試みを始めています。それは何かと言うと無濾過のオイルを限定でリリース。なんか、無濾過って響きがいいでしょ? 本来オリーブオイルはいくつかの工程の先に濾過をして瓶詰めになります。ところが今回、10月~11月に収穫したてのオリーブオイルを無濾過で瓶詰め、そして空輸で日本に。「えっ? それってなんかいいことあるの?」ですよ。無濾過で時間をかけずに味わうということは、オリーブ本来の果肉由来の成分が多くて香りもフレッシュなんです。味わいは通常品より濃厚だったり、渋みも苦味も強いです。だからこそいつもと違うマリアージュが体感できるんですね。時間の経過と共にまろやかに変化もしていきます。そんな変化も楽しめるのが無濾過のオリーブオイル。僕も楽しみにしていて、春菊のサラダにあわせてみようか? 蛋白な白身魚にあわせてみようか?



赤身の牛肉にもいいかも。などと妄想を膨らませています。

何千種類もあるといわれるオリーブオイル。ワインと一緒にベストマッチなものを見つけるのもなかなか難しいですが、現地のフレッシュ感をそのまま詰めたオリーブオイルを時間と共に変化していくのを楽しめるなんていいですね。ワインをプレゼントするのも好みに合うものというよりも、知らないものを楽しんでもらうことが最大のギフトなのかも。今年はこの無濾過のエキストラバージンオイルをクリスマスプレゼントに贈って楽しんでもらうのもいいかもですね。なんとってオリーブは平和の象徴。愛のあるギフトになりそうです。■



NEW!

パレスチナ
エキストラバージンオリーブオイル
(無濾過)
単品.....1,480円(税込)
3本セット.....4,115円(税込)
12本入/箱.....15,444円(税込)
詳しくは裏表紙をご参照ください。

Recipe

これからの季節によく登場する大根を使ってシンプルに。よくすりおろした玉ねぎドレッシングの代わりにどうぞ。

大根おろし.....100g
オリーブオイル.....50cc
酢.....5~10cc
塩.....2g

青魚系、焼き魚にはもちろん、サーモンのような脂ののった魚にもあいます。サーモンとまぐろの漬けちらしにかけて食べたら美味かった!

筆者プロフィール

出張料理「きまぐれや」シェフ 吉田友則

製菓製パンの専門学校で勉強した後、料理の世界に入る。長野県八ヶ岳の井出忠利氏に師事し、ジャンルに囚われない季節感を大事にした料理を目指すべく海外に渡る。帰国後、イタリアン、フレンチ、洋食屋などで経験を積み、口福感の残る料理を提供すべく独自の活動を展開している。日本一移動するレストラン「きまぐれや」は16年目を迎え、開けたドアは2400軒。



自慢
する人

伊藤文美 / いとう・あやみ
自給農園ミルパスタッフ

右が恒さん・左が筆者。



成 田空港近くに農業を使わずに約40年、野菜を育て続けてきた農園がありま す。農園長の石井恒司さん(68歳)、通称「恒さん」は、もつと多くの人に土に触れてもらい、自分の畑を「農」や「暮らし」を見つめる場に変えたいと、今年の春「自給農園ミルパ」をオープンしました。私は自給農園ミルパのスタッフで、東京から成田に移り住んで6年目の百姓見習い。ミルパの会員さんの野菜作りのお手伝いや、日々の農作業や施設管理などを行っています。ミルパでは豊約5枚分の畑を借りて自分の食べたい野菜を作ることが

わたしの友産友消じまん 10

自給農園ミルパの巻



テカすぎズッキーニの収穫。(一番右・恒さん)



アイガモにエサをあげる。

できます。そのほかに共有畑もあり、来た人は必ずたくさん野菜を収穫して帰れます。旬の野菜を知って食べてほしい、ミルパで日々の野菜はまかなえるように、と思っっています。野菜だけでなく、ミルパには果樹や実のなる樹がたくさん。栗、柿、さくらんぼ、キウイ、びわ、ぎんなん、梅、柚子。ブドウとイチゴも始めました。アイガモ農法でお米作り。

豚、鶏もいます。すべては恒さんが長年育て築き上げてきたもの。小屋の土壁を塗り直してみんなが集える場所にしたり、ピザ釜を作ったり、竹で大きなブランコを作ったり。野菜の育て方だけでなく、火の燃やし方やモノ作りなど、恒さんが長年かけて身につけてきた「自給の技」をおすそわけしてくれます。そんな恒さんは子どもたちにも大人気! 恒さんの隣でトンカチ持ったり、鋏を持ったり。恒さんに憧れ、真似をして、いつかは恒さんみたいになれるようになります。大人たちも楽しそうに見守っています。■

自給農園ミルパ
千葉県成田市東峰109
(e-mail) milpa.agriside@gmail.com
(website) http://www.jikyumilpa.com/



ある日の持ち帰り野菜メニュー。



昔ながらのかまど「ぬかくど」。



ミルパのごはんはいつも採れたて野菜。

【事務局だより】

編集後記

今号に届けられた原稿は、ポコポコに始まり特集記事から東ティモールの子どもキャンプまで、期せずして「いのち」「自然」「人とのつながり」そして「地域」がキーワードになった。APLAにつながる仲間たちが思い描く世界はさまざまあっても、根幹のところでは同じ願いをもっていることをつくづく感じた号でした。(大橋)

今号では、久しぶりに取材に行きました。「エディブル」に関わる3名の素敵な方たちとの出会いでした。紙面上の関係で何った話の半分も盛り込めず残念。先の見えない暗い話が多い昨今、自分たちの手で着実に足元から何かを作り変えていくことで未来への実感をつかめるのではないだろうか……。特集で取り上げた各地域の取り組みに希望を感じました。(吉澤)

今号は、立て続けの海外出張と重なってほとんど編集作業に参加できませんでした。校正をしながらそれぞれの原稿を読ませていただきましたが、斎藤彩葉ちゃんの作文にじーン。涙もろい今日この頃です。(野川)

ハリーナ HALINA

2016年11月号 vol.02-no.34
2016年11月1日発行

【編集長】
大橋成子

【編集者】
吉澤真満子
野川未央

【表紙写真】
長倉徳生

【デザイン・制作】
十年舎

【編集・発行】
特定非営利活動法人APLA
(APLA/あぷら: Alternative People's Linkage in Asia)
〒169-0072
東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿3F
tel. 03-5273-8160
fax. 03-5273-8667
e-mail info@apla.jp
URL http://www.apla.jp

【印刷】
株式会社セイズ

事務局の動き(2016年8月～2016年10月)	
8月 4日～13日	東ティモールに野川が出張しました。8月7日～11日には、環境教育キャンプ「Perma Kids Camp」が開催されました。
8月 6日、7日	特定非営利活動法人開発教育協議会(DEAR)の全国研修会に出店しました。
8月 7日	東京朝市・アースティマーケットに出店しました。
8月 14日～17日	インドネシアに野川が出張しました。
8月 20日	TPPを批准させない! 全国共同行動8.20キックオフ集會に秋山が参加しました。
8月 27日	パルシステム東京平和フェスに出店しました。
8月 27日、28日	くらん基金報告会に参加しました。
8月 30日	友産友消のススメ②を開催しました。
9月 3日	しらかかの会10周年記念の集いに参加し、野川が活動報告をしました。
9月 5日～15日	フィリピン・ネグロス島に寺田が出張しました。
9月 7日～13日	グリーンコープ共同体主催 fromネグロス組合員ツアーでインドネシア州バブアを訪問し、野川が同行しました。
9月 23日	農民発電で地域再生～東京と福島でつながろう～を開催しました。
9月 24日	理事会・評議員会を開催しました。
9月 25日	生活クラブ生協フェスタに出店しました。
9月 25日	東京朝市・アースティマーケットに「P to P café」として出店しました。
9月 27日	生活クラブ京都エルコープとキッチン・ハリーナ(京都市)で「民衆交易のお話会」に参加しました。
9月 28日	友産友消のススメ③を開催しました。
9月 30日	パルシステム・パルワゴンに出店しました。
10月 2日～18日	フィリピン・ネグロス島に寺田が出張しました。
10月 8日～14日	フィリピン・ネグロス島と東ティモールの若者交流プログラムが実施され、野川と寺田が同行しました。
10月 13日	アユース組織強化シェアリング&勉強会に吉澤が参加しました。
10月 16日	第10回土と平和の祭典に出店しました。
10月 17日	グリーンコープ共同体主催 fromネグロス学習会に野川が参加しました。
10月 21日	パルシステム東京東大和委員会で「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップが開催されました。
10月 22日	東京朝市・アースティマーケットに「P to P café」として出店しました。
10月 22日	友産友消のススメ④を開催しました。
10月 24日	パルシステム埼玉・平和募金団体交流会に参加しました。
10月 28日	フェアトレード市@堀ノ内妙法寺に出店しました。

事務局からお知らせ

以下の呼びかけに賛同・協力しました。

- 緊急声明 生物多様性の宝庫、やんばるの森と住民の生活を守るために行動を! 高江ヘリパッド建設中止を!
- 「TPPを批准させない! 全国共同行動」
- 高江オスプレイパッド建設…いま何が起きているのか? 小口幸人弁護士を迎えて
- 3ヵ国市民社会によるプロサバナ事業に関する共同抗議声明・公開質問 ～政府文書の公開を受けて～

「福島の子どもたちに届けよう バナナ募金」へご協力を!

17施設、約1300人の子どもたちへバナナの発送を継続してきていますが、募金額が減少してきております。皆様のご支援・ご協力、よろしく願いいたします。



KONINが設置したゴミ箱。

「クドウン・ペル村がモデルとなって、シドアルジョ地域でのゴミの自治的マネジメントを拡大していきたい」と抱負を語っています。持続可能なエビ養殖のためのKONINの挑戦をぜひ応援してください。(APLA事務局・野川)

エコシユリンプを加工するオルター・トレード・インドネシア社(ATINA)と地元のエビ生産者が協力して立ち上げた「インドネシア保全(KONIN)」というNGOがあります。KONINは、東ジャワ州のシドアルジョで代々続いてきた粗放型養殖が子どもや孫の世代まで続けていけるように、地域の環境保全活動に取り組んできています。APLAはKONINと協力して、

青年向けの環境セミナーを開催することがありますが、KONINは現在、養殖池周辺のマングローブの植樹、養殖池地域に接する村でのゴミ回収プログラム、エビ生産者の女性たちのための食品加工のワークショップなどを精力的におこなっています。KONINの次の目標は、ゴミ回収プログラムが軌道に乗ってきたクドウン・ペル村で、住民自身によりゴミの回収・リサイクルを運営する組織を立ち上げることです。エコシユリンプ生産者でKONINの代表をつとめるイルルさんは、

「KONINの次の目標は、ゴミ回収プログラムが軌道に乗ってきたクドウン・ペル村で、住民自身によりゴミの回収・リサイクルを運営する組織を立ち上げることです。エコシユリンプ生産者でKONINの代表をつとめるイルルさんは、RCの運営を心配する声がたくさんありましたが、心配はならないようです。スタッフ6人がさらに一致団結し、よりよくしていこうと毎日必死に努めています。特に新しく事務局長となったエムエムくん(RC第一期卒業生)は、その責任もあつてかミーティングの際も自分の意見をはっきりと発言するようになり、他の組織との話し合いでは年上の代表や委員長が相手でもおどろきず対応しています。まるでこれまでのアンボさんみたくです。彼曰く「これまで隣でずっと見てきたことをまねしているだけ」とのこと。

カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(以下、RC)の代表を務めていたアルフレッド・ボディオオス氏(通称アンボさの)逝去後、RCの運営を心配する声がたくさんありましたが、心配はならないようです。スタッフ6人がさらに一致団結し、よりよくしていこうと毎日必死に努めています。特に新しく事務局長となったエムエムくん(RC第一期卒業生)は、その責任もあつてかミーティングの際も自分の意見をはっきりと発言するようになり、他の組織との話し合いでは年上の代表や委員長が相手でもおどろきず対応しています。まるでこれまでのアンボさんみたくです。彼曰く「これまで隣でずっと見てきたことをまねしているだけ」とのこと。

今年、新たな節目を迎え、世代交代しはじめたRCをこれから温かく見守ってください。最新情報は随時HP、Facebook、ハリーナ等でお伝えいたします。KONINスタッフによる現地からの情報発信Facebookもあります。ご覧ください。(APLA事務局・寺田)

Facebook: KaneshigeFarm-RuralCampusFoundation

From Indonesia【インドネシアより】
エビ養殖池周辺の村で
ゴミ回収とリサイクルを!

青年向けの環境セミナーを開催することがありますが、KONINは現在、養殖池周辺のマングローブの植樹、養殖池地域に接する村でのゴミ回収プログラム、エビ生産者の女性たちための食品加工のワークショップなどを精力的におこなっています。

From Negros, Philippines【ネグロスより】
スタッフも研修生たちも
頑張っています。

カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(以下、RC)の代表を務めていたアルフレッド・ボディオオス氏(通称アンボさの)逝去後、RCの運営を心配する声がたくさんありましたが、心配はならないようです。スタッフ6人がさらに一致団結し、よりよくしていこうと毎日必死に努めています。特に新しく事務局長となったエムエムくん(RC第一期卒業生)は、その責任もあつてかミーティングの際も自分の意見をはっきりと発言するようになり、他の組織との話し合いでは年上の代表や委員長が相手でもおどろきず対応しています。まるでこれまでのアンボさんみたくです。彼曰く「これまで隣でずっと見てきたことをまねしているだけ」とのこと。



組織との話し合いの様子(左がエムエムくん)。